

監修

高木市之助
山岸德平

久松潛一
小島吉雄

徒然草

橘純一校註

監修

高木市之助
山岸德平

久松潜一
小島吉雄

徒然草

橘純一校註

朝日新聞社刊
日本古典全書

橘 純一（たちばなじゅんいち）

明治十七年東京生。昭和二十九年
歿。東京大學國文學科卒業。陸軍
大學校、東京文科大學、跡見學園
短期大學各教授。主著「つれづれ」
草通釋、大鏡通釋、評註徒然草新
講等。

日本古典全書

「徒然草」 橘 純一校註

昭和二十二年一月二十五日初版發行

昭和五十三年八月十五日第三四刷發行

印刷所 明善印刷株式會社

發行所 朝日新聞社（東京都千代田區

有樂町・大阪市北區中之島・北九州

市小倉北區砂津・名古屋市中區榮）

定價 七五〇圓

目次

解 説	三
-----	---

一、著者卜部兼好	三
----------	---

二、著作の時期	一〇
---------	----

三、内容と思想	三
---------	---

四、諸本と註釋	四
---------	---

凡 例	五
-----	---

本書本文の校訂について	四
-------------	---

本書の頭註について	六
-----------	---

本 文	八七
-----	----

序 段	つれづれなるままに……………	八七
第一段	いでや此の世にうまれては……………	八七
第二段	いにしへの聖の御代の……………	八九
第三段	よろづにいみじくとも……………	八九
第四段	後の世の事心にわすれず……………	九〇
第五段	不幸に愁にしづめる人の……………	九〇
第六段	わが身のやんごとなからんにも……………	九〇
第七段	あだし野の露……………	九一
第八段	世の人の心惑はす事……………	九三
第九段	女は髪のためでたからんこそ……………	九三
第一〇段	家居の、つきづきしく……………	九三
第一一段	神無月の頃……………	九三
第一二段	おなじ心ならん人と……………	九三
第一三段	ひとり燈灯のもとに……………	九六
第一四段	和歌こそ……………	九六
第一五段	いづくにもあれ……………	九六
第一六段	神樂こそ……………	九八
第一七段	山寺にかきこもり……………	九八
第一八段	人は己をつづまやかにし……………	九八
第一九段	折節の移り變るこそ……………	一〇〇
第二〇段	なにがしとかやいひし世捨人の……………	一〇三
第二一段	よろづのことは月見るにこそ……………	一〇三
第二二段	何事も、古き世のみぞ……………	一〇四
第二三段	衰へたる末の世とはいへど……………	一〇四
第二四段	齋宮の、野の宮に……………	一〇五
第二五段	飛鳥川の淵瀬……………	一〇六
第二六段	風も吹きあへず……………	一〇七
第二七段	御國ゆづりの節會……………	一〇八
第二八段	諒闇の年ばかり……………	一〇八
第二九段	静かに思へば……………	一〇八
第三〇段	人の亡きあとばかり……………	一〇九
第三一段	雪の面白うふりたりし朝……………	一一一

第三二段	九月廿日の頃……………	一二	第四八段	光親の卿、院の最勝講奉行して……………	二三
第三三段	今の内裏造り出されて……………	二三	第四九段	老來りて……………	二三
第三四段	甲香は……………	二三	第五〇段	應長の頃伊勢の國より……………	二三
第三五段	手のわろき人の……………	二三	第五一段	龜山殿の御池に……………	二四
第三六段	久しくおとづれぬ頃……………	二三	第五二段	仁和寺にある法師……………	二五
第三七段	朝夕へだてなくなれたる人の……………	二三	第五三段	これも仁和寺の法師……………	二五
第三八段	名利につかはれて……………	二四	第五四段	御室に、いみじき兒の……………	二七
第三九段	ある人、法然上人に……………	二六	第五五段	家の造りやうは……………	二六
第四〇段	因幡の國に……………	二六	第五六段	久しく隔たりて……………	二六
第四一段	五月五日賀茂の競馬を……………	二六	第五七段	人の語り出たる歌物語の……………	二九
第四二段	唐橋中將といふ人の子に……………	二八	第五八段	道心あらば……………	二九
第四三段	春の暮つ方……………	二八	第五九段	大事を思ひ立たん人は……………	二三
第四四段	あやしの竹の編戸……………	二九	第六〇段	眞乗院に、盛親僧都とて……………	二三
第四五段	公世の二位の兄人に……………	三〇	第六一段	御産のとき……………	三四
第四六段	柳原の邊に……………	三二	第六二段	延政門院……………	三四
第四七段	ある人清水へ參りけるに……………	三三	第六三段	後七日の阿闍梨……………	三四

第六四段	車の五つ緒は……………	一三五	第八〇段	人毎に我が身に……………	一四七
第六五段	此の頃の冠は……………	一三五	第八一段	屏風、障子などの……………	一四六
第六六段	岡本の關白殿……………	一三五	第八二段	うすものの表紙は……………	一四七
第六七段	賀茂の岩本、橋本は……………	一三七	第八三段	竹林院の入道左大臣殿……………	一四七
第六八段	筑紫に、なにがしの押領使……………	一三六	第八四段	法顯三藏の……………	一四六
第六九段	書寫の上人は……………	一三六	第八五段	人の心すなほならねば……………	一四六
第七〇段	元應の、清晝堂の御遊に……………	一三六	第八六段	惟繼の中納言は……………	一四九
第七一段	名を聞くより……………	一三六	第八七段	下部に酒飲まする事は……………	一五〇
第七二段	賤しげなるもの……………	一四〇	第八八段	ある者、小野の道風の書ける……………	一五一
第七三段	世にかたり傳ふる事……………	一四〇	第八九段	奥山に、猫またといふもの……………	一五三
第七四段	蟻の如くに集まりて……………	一四三	第九〇段	大納言法印の……………	一五三
第七五段	つれづれわぶる人は……………	一四三	第九一段	赤舌日といふ事……………	一五三
第七六段	世覚えはなやかなる……………	一四四	第九二段	ある人、弓射る事を習ふに……………	一五四
第七七段	世の中に、その頃人の……………	一四四	第九三段	牛を賣る者あり……………	一五五
第七八段	今様のことどもの……………	一四四	第九四段	常磐井の相國……………	一五六
第七九段	何事も入り立たぬ様……………	一四五	第九五段	箱のくりかたに……………	一五七

第九六段	めなもみといふ草あり……………	一五七	第一二段	明日は遠國へ……………	一六六
第九七段	其の物に附きて……………	一五八	第一三段	四十にも餘りぬる人の……………	一六九
第九八段	たふとき聖のいひ置きける事を……………	一五七	第一四段	今出川のおほい殿……………	一七〇
第九九段	堀川の相國は……………	一五九	第一五段	宿河原といふ所にて……………	一七〇
第一〇〇段	久我の相國は……………	一五九	第一六段	寺院の號……………	一七三
第一〇一段	ある人、任大臣の節會の……………	一五九	第一七段	友とするに……………	一七三
第一〇二段	尹ノ大納言光忠入道……………	一六〇	第一八段	鯉のあつもの食ひたる日は……………	一七三
第一〇三段	大覺寺殿にて……………	一六〇	第一九段	鎌倉の海に、かつをといふ魚は……………	一七三
第一〇四段	荒れたる宿の、人目無きに……………	一六一	第二〇段	唐の物は……………	一七四
第一〇五段	北の屋かげに……………	一六二	第二一段	養ひ飼ふ物には……………	一七四
第一〇六段	高野の證空上人……………	一六三	第二二段	人の才能は……………	一七五
第一〇七段	女の物いひかけたる返事……………	一六四	第二三段	無益のことをなして……………	一七六
第一〇八段	寸陰惜しむ人なし……………	一六五	第二四段	是法師は……………	一七七
第一〇九段	高名の木のぼり……………	一六七	第二五段	人におくれて……………	一七七
第一一〇段	雙六の上手といひし人に……………	一六七	第二六段	ばくちの負きはまりて……………	一七八
第一一段	圍碁、雙六好みて……………	一六八	第二七段	改めて益なき事は……………	一七八

第一二八段	雅房の大納言は……………	一七	第一四四段	梅の尾の上人……………	一九七
第一二九段	顔回は……………	一八〇	第一四五段	御隨身秦の重射……………	一九八
第一三〇段	物に争はず……………	一八〇	第一四六段	明雲座主……………	一九八
第一三一一段	貧しき者は……………	一八一	第一四七段	灸治あまた所になりぬれば……………	一九九
第一三二一段	鳥羽の作り道は……………	一八三	第一四八段	四十以後の人……………	一九九
第一三三一段	夜の御殿は……………	一八三	第一四九段	鹿茸を鼻にあてて……………	一九九
第一三四一段	高倉院の法華堂の三昧僧……………	一八三	第一五〇段	能をつかんとする人……………	一九九
第一三五一段	資季の大納言入道……………	一八四	第一五一一段	ある人のいはく……………	二〇〇
第一三六一段	くすし篤成……………	一八六	第一五二一段	西大寺の静然上人……………	二〇一
第一三七一段	花は盛りに……………	一八六	第一五三一段	爲兼の大納言入道……………	二〇一
第一三八一段	祭過ぎぬれば……………	一九一	第一五四一段	此の人、東寺の門に……………	二〇三
第一三九一段	家にありたき木は……………	一九三	第一五五一段	世にしたがはん人は……………	二〇三
第一四〇一段	身死して財残る事は……………	一九三	第一五六一段	大臣の大纓は……………	二〇四
第一四一段	悲田院の堯蓮上人は……………	一九四	第一五七一段	筆を取れば……………	二〇四
第一四二一段	心無しと見ゆる者も……………	一九五	第一五八一段	盃のそこを捨つる事は……………	二〇五
第一四三一段	人の終焉の有様の……………	一九七	第一五九一段	みなむすびといふは……………	二〇五

第一六〇段	門に額掛くるを……………	二〇五	第一七六段	黒戸は……………	二一八
第一六一段	花の盛りは……………	二〇六	第一七七段	鎌倉の中書王にて……………	二一八
第一六二段	遍照寺の承仕法師……………	二〇六	第一七八段	ある所の侍ども……………	二一九
第一六三段	太衝の太の字……………	二〇七	第一七九段	入宋の沙門道眼上人……………	二一九
第一六四段	世の人相會ふ時……………	二〇七	第一八〇段	さぎちやうは……………	二二〇
第一六五段	あづまの人の……………	二〇七	第一八一一段	ふれふれこゆき……………	二二〇
第一六六段	人間の營みあへるわざを……………	二〇八	第一八二段	四條大納言隆親卿……………	二二〇
第一六七段	一道に携はる人……………	二〇八	第一八三段	人つく牛をば……………	二二一
第一六八段	年老いたる人の……………	二〇九	第一八四段	相模守時頼の母は……………	二二一
第一六九段	何事の式といふ事は……………	二一〇	第一八五段	城ノ陸奥ノ守泰盛は……………	二二二
第一七〇段	さしたる事なくて……………	二一〇	第一八六段	吉田と申す馬乗の……………	二二三
第一七一一段	貝を覆ふ人の……………	二一一	第一八七段	よろづの道の人……………	二二三
第一七二段	若き時は……………	二一二	第一八八段	ある者、子を法師になして……………	二二三
第一七三段	小野ノ小町が事……………	二二三	第一八九段	今日は其の事を……………	二二七
第一七四段	小鷹によき犬……………	二二三	第一九〇段	妻といふものこそ……………	二二七
第一七五段	世には心得ぬ事の……………	二二四	第一九一段	夜に入りて物のはえなし……………	二二九

第一九二段	神佛にも、人のまうでぬ日……………	三九	第二〇八段	經文などの紐をゆふに……………	三七
第一九三段	くらき人の……………	三〇	第二〇九段	人の田を論ずるもの……………	三七
第一九四段	達人の人を見る眼は……………	三〇	第二一〇段	喚子鳥は……………	三六
第一九五段	ある人久我繩手を通りけるに……………	三三	第二一一段	よろづの事は頼むべからず……………	三八
第一九六段	東大寺の神輿……………	三三	第二一二段	秋の月は……………	三九
第一九七段	諸寺の僧のみにあらず……………	三三	第二一三段	御前の火爐に……………	三九
第一九八段	揚名の介に限らず……………	三三	第二一四段	想夫戀といふ樂は……………	四〇
第一九九段	横川の行宣法印が……………	三三	第二一五段	平ノ宣時朝臣……………	四〇
第二〇〇段	呉竹は葉細く……………	三三	第二一六段	最明寺ノ入道……………	四一
第二〇一段	退凡下乗の率都婆……………	三四	第二一七段	ある大福長者のいはく……………	四三
第二〇二段	十月を神無月といひて……………	三四	第二一八段	狐は人にくひつくものなり……………	四四
第二〇三段	勅勘の所に……………	三四	第二一九段	四條ノ黃門……………	四四
第二〇四段	犯人を咎にて……………	三五	第二二〇段	何事も邊土は……………	四六
第二〇五段	比叡山に、大師勸請の……………	三五	第二二一段	建治、弘安の頃は……………	四七
第二〇六段	徳大寺ノ故大臣殿……………	三五	第二二二段	竹谷の乗願房……………	四七
第二〇七段	龜山殿建てられんとて……………	三六	第二二三段	たづのおほいどのは……………	四八

第二二四段	陰陽師有宗入道……………	二四六	第二三四段	人の、物を問ひたるに……………	二五四
第二二五段	多久資が申しけるは……………	二四九	第二三五段	主ある家には……………	二五五
第二二六段	後鳥羽院の御時……………	二五〇	第二三六段	丹波に出雲といふ所……………	二五五
第二二七段	六時禮讃は……………	二五〇	第二三七段	柳箱に据うるものは……………	二五七
第二二八段	千本の釋迦念佛は……………	二五〇	第二三八段	御隨身近友が……………	二六一
第二二九段	よき細工は……………	二五〇	第二三九段	八月十五日、九月十三日は……………	二六一
第二三〇段	五條内裏には……………	二五一	第二四〇段	しのぶの浦の蜚の見るめも……………	二六一
第二三一段	園の別當入道は……………	二五一	第二四一段	望月のまどかなる事は……………	二六三
第二三二段	すべて人は……………	二五三	第二四二段	とこしなへに違順に……………	二六四
第二三三段	よろづのところがあらしと思はば……………	二五三	第二四三段	八つになりし年……………	二六四

徒
然
草

橘

純

一

解 説

一、著者ト部兼好

徒然草の著者については、永享三年（西紀一四三一）の奥書のある正徹自筆書寫の徒然草（靜嘉堂文庫藏）に兼好法師作也とし、また同人の著、徹書記物語にも徒然草を以て兼好法師の著として褒めてゐることなどによつて、兼好法師の著とせられてゐる。このことは、徒然草の内容から著作年代を調査したり、その思想方面を考へてみた結果とよく適合するので、まづ確かな説としてよい。それならば兼好法師といふ人は、どんな人であつたか。

兼好法師の傳については、あまり多くのことは知られてゐないが、とにかく彼は鎌倉時代の末期における貴族社會の外郭末班に列した人である。尤も彼は若い時に出家して貴族圏外における自由な遁世者の生活を楽しんだのであらうが、彼の生立ちが齎した趣味の方面では、宮廷的貴族的の型を脱せず、殊に當時の貴族的社交手段であつた和歌に堪能であつた上から、大中納言級の地位の人々ともほぼ對等な交際をしてゐたらしいことが、彼の家集によつて窺はれる。

兼好の家系は卜部氏であり、卜部氏系圖によると、彼の祖父兼名は從四位下右京大夫、父の兼顯は治部少輔、また、その兄弟としては、大僧正慈遍と民部大輔從五位上の兼雄があり、彼自身も出家以前に左兵衛佐になつた由の記載が見える。卜部の家は元來神祇官に奉仕した家で、平安朝以來藤原氏の氏神である吉田神社の社務職を世襲した家であるから、収入も多く、位置の割には羽振りもよかつたことと想像される。尤も兼好の家は、その祖父兼名に始まり、卜部の宗家から分出した傍系であるが、兼好も出家以前は洛東吉田に住んでゐた様子であるから（徒然草第五十段參照）、宗家の庇護の下に相當な生活をし、出家後も生活上の不安なく、悠々自適の生活を續け得たものと思はれる。兼好は思想上では相當民主主義的傾向を示してゐるのに、實際生活、趣味生活の上では、なかなか氣位高くかまへてゐるのも此の故であらう。

五月五日、加茂の競馬を見侍りしに、車の前に雜人立ちへだてて見えざりしかば……（四十一段）

一條室町に鬼ありとののしりあへり。……はやく跡なき事にはあらざんめりとて、人をやりて見するに……（五十段）

などによつて、彼が競馬などの物見のをりは、牛車に乗つて出かけ、そして、京都の市民をさして雜人と呼んだこと、また外出の際、車ならずとも、供人を連れてあるく程の身分であつたことが想像される。尤もこれは出家以前のこと、出家後は清貧に甘んじて暮らしてゐたともいはれ、甚だしいのは、蓆を編んで、それを京に賣つて生活してゐたなど、まことしやかに書いた兼好傳もあるが、これらは、中國におけ

る古の聖賢に擬した作り話であらう。頼阿の續草庵集卷四に、

世の中しづかならざりし比兼好が許より、「よねたまへ、ぜにもほし」といふことを沓冠におきて

よもすずし、ねざめのかりほ、たまくらも、まそでも秋に、へだてなきかぜ

返し、よねはなし、ぜにすこし

よるもうし、ねたくわがせこ、はてはこず、なほざりにだに、しばしとひませ

とあるのによつて、その出家生活の窮乏さの證とする説もあるが、沓冠の歌は遊戲的な歌で、歌道の傳説によると、仁和の御門（或は村上天皇とも傳へる）が女御たちに、

あふさかも、はてはゆききの、せきもあず、たづねてとひこ、きなばかへさじ

すなはち合はせ、薰きものすこしといふ言葉を五句各の上下に隠して示されたところ、廣幡の御息所のみがその意を得て、薰物を奉つたといふ。これは歌にたづさはる誰もが知つてゐたことであつて、これに倣つてよねたまへ、ぜにもほしといふやうな、人に物を乞ふ意味の題で戯れによんだのであるか、さうでなければ世の中しづかならざりし頃、すなはち元弘或は延元以後の戦亂時代になつてからの窮乏生活中のことではないかと思はれる。少くとも徒然草一篇のうちに、彼の物質生活の窮迫さを窺はしめるやうな記載は一つもないと言つてよい。反對に、彼の友人が鎌倉から尋ねて來て、いきなり「この庭のいたづらにひろきこと、あさましく、あるべからぬ事なり」と意見した（二百二十四段）といふ文に見ても、相當な廣い